



3 限界集落高齢者の生きがい意識

—中国山地の山村調査から—

山本 努

＜熊本大学文学部教授＞



はじめに

① 「生きがい」の問題 ●●●●●●●●●●●●●●●●

「生きがい」は定義の困難な言葉である。しかし、神谷（1966）や見田（1970）や鈴木（1986）やMathews（1996）の内容を持ちうるということで、社会学の実証研究に用いてよいと考える。

これら4者の「生きがい」に共通の要素は、(1)生きる「目的」や「意味」である。また、この言葉が(2)日本語に固有であり、(3)日本人の生活から生まれたことは重要で

表1 「生きがい」の概念、考え方

| | |
|-------------------------|--|
| 神谷 (1966 : 12) | 生きがいということばは、日本語だけにあるらしい。こういうことばがあるということは日本人の心の生活のなかで、生きる目的や意味や価値が問題にされてきたことを示すものであろう。 |
| 見田 (1970 : 9) | 人間の行動には目的があるが、その目的にはまた目的があるというふうに、どんどん追及してゆくことができる。「なぜ」という問いをどこまでもくりかえしてゆくと、結局自分は何のために生きているのかという究極の問いにつきあたる。この究極の問いにたいして、それぞれの人が、実感をこめて答える仕方が<生きがい>であるというふうに、さしあたり定義しておくことができよう。 |
| 見田 (1970 : 24) | <生きがい>という問題は、その最も深い層では、人類の歴史のなかで、生きる手段が中心の問題である時代から、生きる目的が中心の問題である時代への、巨大な過渡期としての現代を性格づける、根源的な問いとして把握されなければならない。 |
| 鈴木 (1986 : 499) | 自分がこの世に生きており、存在しているのは、意味のあることであり、自分の生と存在とは、生きるに値する生であり、存在理由のある存在であるという意識を、生きがいとよんでおります。 |
| Mathews (1996 : vii) | There is a term in Japanese, <i>ikigai</i> , which means “that which most makes one’s life seem worth living.” Although American English has no clear equivalent to this term, <i>ikigai</i> applies not only to Japanese lives but to American lives as well. <i>Ikigai</i> is what, on day-to-day and year-to-year basis, each of us essentially lives for…. |

ある。同時に、(4)欧米などの「豊かな」先進工業国に通底する問題であることも重要である(表1)。

さらに、「幸福感」と「生きがい」の神谷(1966:24-26)による比較考察は非常に有益である。ここから「生きがい」という言葉の心理学的意義が示される。つまり、生きがい感は、(1)幸福感よりも「未来」に向かう。(2)生きがい感の方が自我の中心にせまっている。(3)生きがい感には、価値の認識を含むことが多い。言い換えれば、「幸福感」よりも「生きがい感」の方が深みのある研究が期待できる。

くわえて、見田(1970:194-197)の生きがい欲求の検討も非常に重要である。見田によれば、生きがい欲求は根本的に相乗的であり、他の欲求(=たとえば、衣食住、金銭、地位、権力、性などの欲求)は根本的に相克的である¹⁾。ここに「生きがい」という概念の社会学的意義がある。

1

「生きがい」の経験的把握の問題

これに対して、生きがいという概念を実証研究に用いるのに否定的な見解もある。古谷野(2009)によれば、「「生きがい」という語を用いて、生きがいに関する実証研究を行おうとすれば、まず「生きがい」に厳密な定義を与え、測定しなければならない」。しかし、生きがいという語は、「曖昧で多義的な日常生活の用語で、科学的な探求で用いるのには適していない」というのである。

これは自然科学をモデルにした、非常に厳密な見解である。このような「厳密な概念規定」→「厳密な測定」→「厳密な実証研究」というスタイルの研究はなしとはしないが、社会学ではなかなか難しいのも事実である。「すなわち、社会諸科学における測定、分類、概念形成には独特の難しさ」があり、「社会諸科学であつかう概念には、ある程度のあいまいさがあるように思われる」からである(ラザースフェルド、1984:20-22)²⁾。

たとえば、本論文で用いる山村(や限界集落)という言葉にしても、実は厳密な概念規定を示すのは難しい³⁾。しかし、山村(や限界集落)という言葉抜きに、本稿の問題を示すのは困難である。本稿で「生きがい」という言葉を用いるのも同じである。したがって、これらの言葉は、使いながら使い方を考えて行くという研究方針が現実的と思う。

2

本稿の調査における「生きがい」の含意

さて、「はじめに」、**1**では、若干の概念的、方法論的確認作業を行ってきたが、本稿の目的は山村(限界集落)高齢者の生きがい意識の調査研究である。調査のワーディングは、後掲の図2を参照して欲しい。また、このワーディングから含意される「生きがい」の内実は、表2の7領域を含む。この「生きがい」の7領域は、本稿とほぼ同様のワーディングを用いた、鈴木(1986:499-516)の実証研究から得られたものである。この「生きがい」の7領域は、

- ・生きがいの中核構造(「私生活の安定」「自分を生かす」「人間関係維持」)
 - ・生きがいの周辺構造(「生活に変化」「未来展望」「人生の意味」「自由」)
- の2層からなっている。特に、前者の生きがいの中核構造の3項目が生きがい意識と強く相関している(鈴木,1986:512)。

3

限界集落論にみる山村(限界集落)高齢者像 : 先行研究の系譜(1)

山村(限界集落)高齢者の生きがい調査について先行研究をみておこう。これについて先行研究は少ない。しかし、この問題については、大野晃の提唱した、限界集落論の影響は非常に大きい。限界集落とは「65歳以上の高齢者が集落人口の半数を超え、冠婚葬祭をはじめとする田役、道役などの社会的共同生活の維持が困難な状態におか

表2 生きがいの7領域

| |
|---|
| <p>・生きがいの中核構造</p> <ol style="list-style-type: none">(1) 経済的・精神的に安定し、健康で平和な家庭生活を求める心(私生活の安定)(2) 仕事(家事)で能力を発揮し、好きな趣味を楽しむなど、十分に自分を生かすことを求める心(自分を生かす)(3) 愛情、友情、信頼を重んじ、人間関係(交流)を大切にする心(人間関係維持) <p>・生きがいの周辺構造</p> <ol style="list-style-type: none">(4) 新しい経験や冒険をしたり、新しいものをつくるなど、生活に変化を求める心(生活に変化)(5) 夢や野心のある生活目標に向かって努力し、社会の進歩を望むなど、未来に期待する心(未来展望)(6) 美しいもの、真理、善など、人間の品格を高める価値や理想を求める心(人生の意味)(7) 与えられた境遇や秩序にとらわれず、たとえ危険でも自分の運命を自分でえらびとって生きていく、自由を求める心(自由) |
|---|

出典：鈴木広『都市化の研究』恒星社厚生閣，513頁，1986。

れた集落（大野，2007：132）」と定義される。この限界集落では、高齢者の暮らしは非常に暗い。大野によれば、限界集落高齢者の状況は、以下のものである。重要な記述なので、やや長くなるが引用しよう。

「独居老人の滞留する場と化したむら。人影もなく、一日誰とも口をきかずにテレビを相手に夕暮れを待つ老人。時折、天気が良ければ野良仕事に出て、自分で食べる野菜畑の手入れをし、年間36万円の年金だけが頼りの家計に、移動のスーパーのタマゴの棚に思案しながら手をのぼすシワがれた顔。

バスの路線の廃止に交通手段^{あし}を失し、タクシーで気の重い病院通い。一ヶ月分の薬をたのみ、断られ、二週間分の薬を手^{あし}に魚屋で干モノを買い家路を急ぐ。テレビニュースの声だけが聞こえているトタン屋根の家が女主人の帰りを待っているむら。

家の周囲を見渡せば、苔むした石垣が階段状に連なり、かつて棚田であった痕跡をそこにとどめている杉林。何年も人の手が入らず、間伐はおろか枝打ちさえされないまま放置されている“線香林”。日が射さず下草も生えない枯れ枝で覆われている地表面。野鳥のさえずりもなく、枯れ枝を踏む乾いた音以外に何も聞こえてこない“沈黙の林”。田や畑に植林された杉に、年ごとに包囲の輪を狭められ、息をこらして暮らしている老人」（大野，2007：132）。

大野（2007：132）は「これが病める現代山村の偽らざる姿」であるという。ほぼ同様の見解を示すのが曾根（2010）である。

4

限界集落論とは異なる山村（限界集落）高齢者像 ：先行研究の系譜(2)

これに対して、限界集落論とは相当異なる農山村高齢者像を示す論者もいる。徳野（1998）などがそれだが、ここでは農山村高齢者の利点がむしろ強調される。農山村高齢者は、元気であれば農作業を続け生涯現役でいられるし、地域社会から期待もされている。これらのことから、都市の高齢者と比べて、農山村の高齢者は恵まれているというのである（徳野，1998：154－156）。

さらには、山村集落の状況は非常に厳しいが、高齢者の生活を支える仕組みはまだ

減び去っていない。たとえば、木下（2003）によれば、山村高齢者の暮らしは「他出した子どもとのネットワークで、かろうじて命脈を保っている」。また山村高齢者の暮らしは、家族（別居子含めて）、自然、農業（作物）、同じ集落に住む人々（集団参加、集落維持活動）、生活費の安さ、土地に対する愛着などによっても支えられている（高野，2008；吉岡，2010）。

これらの論稿に示される共通点は限界集落論への疑義である。つまり、山村集落にも人々は現に生活しているのであり、「「限界」というレッテルを貼ることは、…ためらわざるを得ない」（吉岡，2010）と考えるのである。高野（2008）のいい方を借りれば、「集落での生活を端から見ればかなり厳しいようにうつるが、（集落の：山本補筆）女性独居高齢者4人の生活は、深刻な状況ばかりではない」ということになる⁵⁾。

5

調査の課題と方法

先行研究の検討から、山村（限界集落）高齢者の生きがい研究には、二つの系譜があることが判明した。限界集落論（大野，2007；曾根，2010）とそれに対する異論（徳野，1998；木下，2003；高野，2008；吉岡，2010）である。

ただし、これらの研究は、山村高齢者生きがい研究そのものというよりは、山村高齢者（生活構造）研究とでもよんだほうが正確である。山村高齢者生きがい研究は、このように山村高齢者（生活構造）研究の一部として展開してきた。

くわえて、これらの調査研究の主な手法は質的調査（モノグラフ）である。勿論、質的モノグラフは意味のある研究である。しかし、調査票を用いた量的調査も必要である。それによって、山村高齢者の生きがい意識の高低などが検討できるからである。たとえば、山村高齢者は限界集落論（**3**）の描くような、「悲惨」といってよいような境遇なのであろうか。そうであれば、山村高齢者の生きがい意識は他の地域と比べて、かなり低いものになるはずである。このような知見は質的調査からは得られ

表3 山村振興法の定める振興山村

| |
|--|
| <p>・ 指定要件：「旧市町村（昭和25年2月1日時点の市町村）単位に林野率（昭和35年）75%以上かつ人口密度（昭和35年）1.16人／町歩未満等」（農林水産省「山村とは（山村の現状等）」（http://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/sanson/s_about/index.html））</p> <p>・ 山村面積：1,785万ha（全国の47%，2010年）</p> <p>・ 山村人口：393万人（全国の3%，2010年）</p> <p>・ 「振興山村」を有する市町村の数は、全国で734（全市町村数の43%，2014年4月1日）</p> <p>・ 高齢化率（65歳以上割合）：山村…34.1%（2010年），全国…23.0%（2010年全国）</p> <p>* 人口，高齢化率は総務省『国勢調査』による</p> |
|--|



図1 振興山村の分布

出典：農林水産省「山村とは（山村の現状等）」
[\(http://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/sanson/s_about/\)](http://www.maff.go.jp/j/nousin/tiiki/sanson/s_about/)

ない。そこで、本稿の課題は、山村（限界集落）高齢者の生きがい意識に関する量的（質問紙）調査の分析となる。なお、本稿で山村とは、山村振興法の定める振興山村（表3）としておきたい⁶⁾。振興山村の分布は図1のようである。

6

調査地域と調査方法の概要

調査地域と調査方法についての概要を示す。

- ① 調査地域：広島市佐伯区湯来町A地区内の4つの地域、20歳以上の全住民621名。
 - ・湯来町は2005年4月25日に広島市佐伯区に編入（平成の大合併）。

- ・同町は2015年4月1日現在、全域が振興山村に指定されている。
- ・調査を実施したA地区は高齢化率52.4%（2010年12月住民基本台帳）であり、限界集落の量的基準（高齢化率50%）を超えている（**3**）。
- ・また、A地区は全国の山村の高齢化率（34.1%、表3）と比較してもかなり高齢化の進んだ地区である。
- ・さらに、A地区内の2つの地域は無医地区⁷⁾でもある。
つまり、当該調査地域は全国の山村一般と比べても、条件不利的な性格がかなり強い地域である。

② 調査期間：2012年6月11日～7月21日

③ 調査方法：質問紙調査

④ 227名（37%）回収。配布は町内会長の協力を得て各世帯へ配布、回収方法は郵送。

7

生きがい調査の基本的知見：どのくらいの人が生きがいを感じているか？ どんなことに生きがいを感じているか？

それでは、調査の基本的知見から確認したい。本稿では高齢者は70歳以上とした。これは、いくつかの老人線の調査から、70歳以上を高齢者と考える者が多かったためである（山本，2013：115）⁸⁾。

そこで、**図2**を見るとまず、A地区の高齢者（70歳以上）の7割程度（70.4%）は生きがいを「十分」あるいは「まあ」感じて暮らしている。つまり、山村限界集落高齢者の大部分は生きがいをもった人々である。ただし、この数字は非高齢者（60歳代以下）の75.2%よりもやや低い⁹⁾。つまり、加齢とともに生きがいを感じる者の割合は少し減退すると思われる。このような結果は他の過疎地域高齢者調査でも得られている¹⁰⁾ので、一応、信頼できる知見と思われる。

では、人々はどのような時に生きがいを感じるのだろうか。それを示したのが**図3**である。これによれば、生きがいを感じる時は、大枠、「家族」→「自分の楽しみ」「仕事」「社会」「農業」→「お金」の順番で3段階の6領域に整理できる。具体的には、56頁のような対応である。

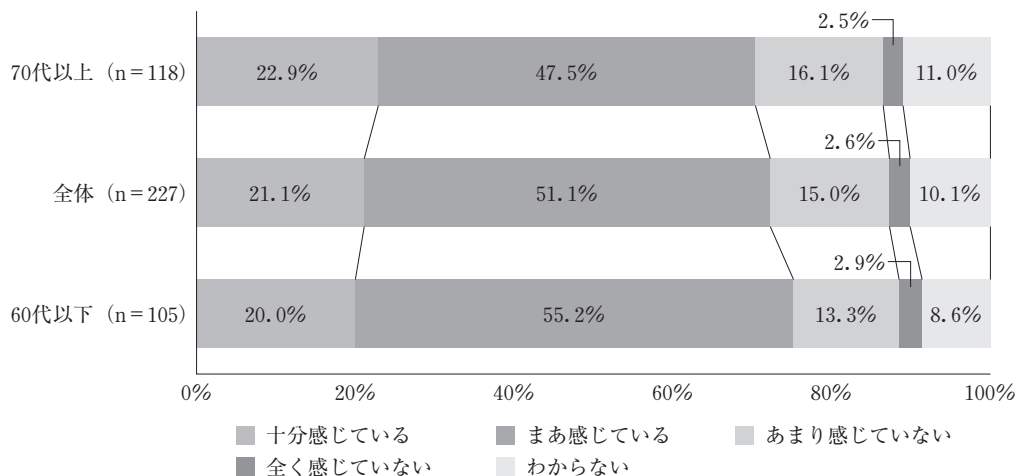


図2 生きがい感：山村限界集落A地区調査

注1：調査では、「あなたは現在、どの程度生きがいを感じていますか」と尋ねて、上記の選択肢からあてはまるもの一つに○をつけてもらった。

注2：全体（227人）には年齢が不明の者を含む。

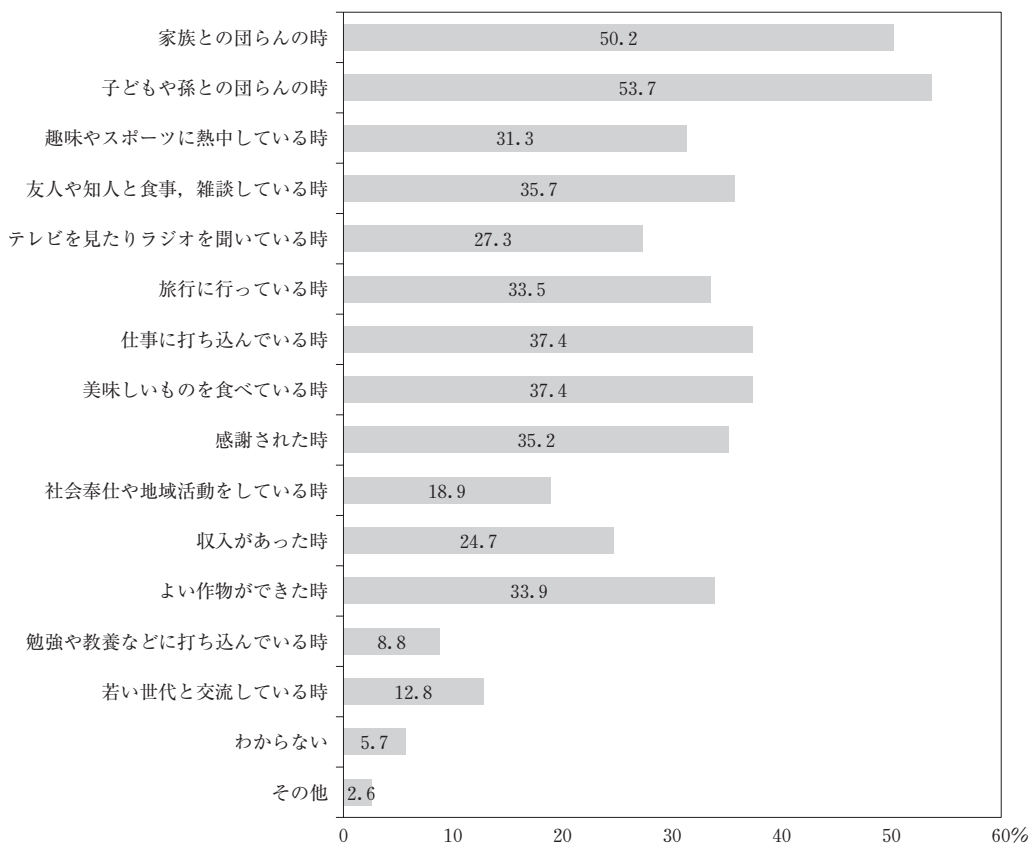


図3 生きがいを感じる時：山村限界集落A地区調査（複数回答）

注：あてはまるものすべてをえらんで回答。

「家族」…「子どもや孫との団らん」53.7%、「家族と団らん」50.2%



「自分の楽しみ」…「美味しいもの食べる」37.4%、「旅行」33.5%、「趣味・スポーツ」31.3%、「テレビ，ラジオ」27.3%
「仕事」…「仕事に打ち込む」37.4%
「社会」…「友人，知人と食事，雑談」35.7%、「感謝された時」35.2%
「農業」…「よい作物ができた」33.9%



「お金」…「収入があった時」24.7%

8

生きがいを感じる時：高齢者，非高齢者比較

この生きがいを感じる時の調査結果を年齢別で比較したのが表4である。これによれば、高齢者（70歳代以上）と非高齢者（60歳代以下）で生きがいを感じる時に違いがある。表4の○囲みの番号は選ばれた割合の多い順で順位をつけたものだが、それによれば、以下のような違いを指摘できる。

まず高齢者では、生きがいを感じる時は、「家族①②」→「農業③」→「自分の楽しみ④⑤⑦」「仕事⑥」→「社会⑧⑨」の順番で4段階程度の5領域に整理できる。非高齢者では、「家族①②」→「社会③④」「仕事④」→「自分の楽しみ④⑦⑨」→「お金⑧」の順番で同じく4段階程度の5領域に整理できる（表4の○囲みの番号参照）。

ここから、高齢者と非高齢者の生きがいを比較すると以下の点が指摘できる。

- ・「家族」が生きがいとしてもっとも多く選ばれるということは高齢者も非高齢者も同じである。したがって、生きがいの基底にあるのは「家族」である。ただし、高齢者では、「子どもや孫との団らん」が、非高齢者では「家族との団らん」がより生きがいになっている。
- ・高齢者では、「家族」について多く選ばれる「生きがい」は「農業」である。これは、今回調査のような農山村高齢者の大きな特色であると思われる。
- ・高齢者では、「社会」の後退が見られる。特に「感謝」の後退は大きい（非高齢者43.5%→高齢者28.0%）。
- ・あわせて高齢者では、「お金」の後退が見られる（非高齢者34.3%→高齢者16.1%）。
- ・「仕事」と「自分の楽しみ」は大きな違いは見られない。ただし、高齢者における、

表4 生きがいを感じる時：山村限界集落A地区調査（複数回答）
—高齢者（70歳代以上）、非高齢者（60歳代以下）比較—

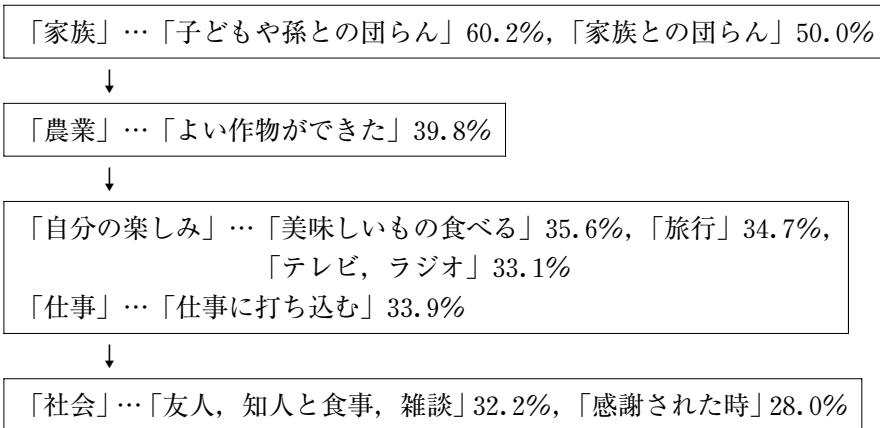
| | 60歳代以下 | 70歳代以上 |
|---------------------------|--------|--------|
| その他 | 3.7% | 0.8% |
| わからない | 4.6% | 5.9% |
| 若い世代と交流している時 | 7.4% | 17.8% |
| 勉強や教養などに打ち込んでいる時 | 10.2% | 6.8% |
| よい作物ができた時（農業） | 26.9% | ③39.8% |
| 収入があった時（お金） | ⑧34.3% | 16.1% |
| 社会奉仕や地域活動をしている時 | 18.5% | 19.5% |
| 感謝された時（社会） | ③43.5% | ⑨28.0% |
| 美味しいものを食べている時（自分の楽しみ） | ④39.8% | ④35.6% |
| 仕事に打ち込んでいる時（仕事） | ④39.8% | ⑥33.9% |
| 旅行に行っている時（自分の楽しみ） | ⑨31.5% | ⑤34.7% |
| テレビを見たりラジオを聞いている時（自分の楽しみ） | 21.3% | ⑦33.1% |
| 友人や知人と食事、雑談している時（社会） | ④39.8% | ⑧32.2 |
| 趣味やスポーツに熱中している時（自分の楽しみ） | ⑦38.0% | 25.4% |
| 子どもや孫との団らんの時（家族） | ②45.4% | ①60.2% |
| 家族との団らんの時（家族） | ①50.9% | ②50.0% |

注：○囲みの数字は順位。ただし、比較的上位の割合にのみ付した。

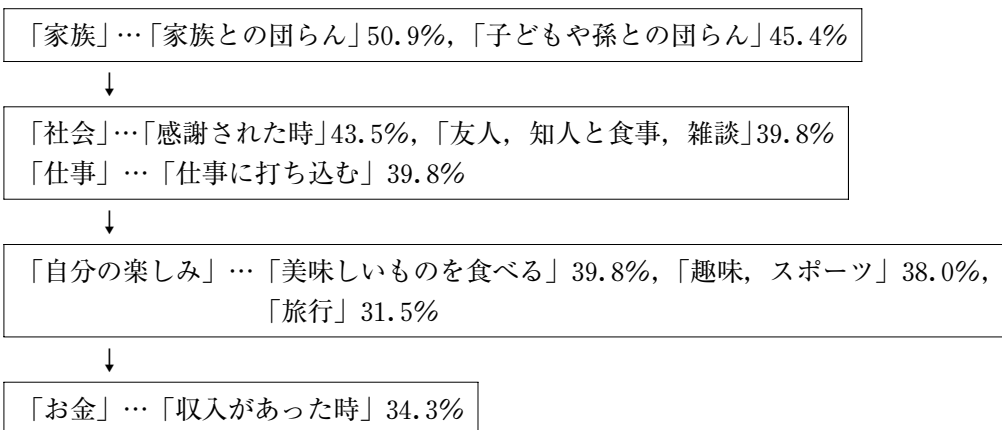
「テレビ・ラジオ」の拡大（非高齢者21.3%→高齢者33.1%）、「趣味・スポーツ」の縮小（非高齢者38.0%→高齢者25.4%）が見られる。高齢者の生きがいにおける、若干の受動化が指摘できるのかもしれない。

これらから示唆されるのは次のようである。高齢者の生きがいにおいては、「社会」「お金」からの後退、さらに一部では「自分の楽しみ」の受動化が見られる。しかし、高齢者の生きがいは、「家族」と「農業」によって大きく支えられている。特に「農業」は高齢者になって大きくでてくる生きがいであり、「社会」「お金」からの後退を埋める重要な「生きがい」である。また、「農業」は山村限界集落を含めて農村高齢者の生きがいの特色とも考えられる。

具体的には、高齢者の「生きがいを感じる時」は、下記のような対応である。



また、非高齢者では、下記のような対応である。



9

生きがいの地域比較：山村限界集落，山村過疎小市，全国（都市）

さてそれでは、高齢者で生きがいを感じる者の割合は地域によって違うのだろうか。この問題は、限界集落論の妥当性を検討するにあたり、非常に重要な課題である。先にみたように、限界集落の限界性は高齢者の生活構造や生活意識にでてくるからである（**3**参照）。

そこでここでは、山村限界集落（A地区）と山村過疎小市（広島県庄原市）と全国の生きがい意識の調査結果を比較したい。なお、ここでは、全国調査のデータが60歳

表5 生きがい感（山村限界集落A地区調査，60歳以上：合計166人）

| | 十分感じている | まあ感じている | あまり感じていない | まったく感じていない | わからない | 合計 |
|---------|---------|---------|-----------|------------|-------|----------------|
| 2012年調査 | 22.3% | 50.6% | 14.5% | 3.0% | 9.6% | 100.0% 166人 |

表6 生きがい感（全国60歳以上，庄原市65歳以上）

| | 十分感じている | 多少感じている | あまり感じていない | まったく感じていない | わからない | 合計 |
|------------|----------|---------|-----------|------------|-------|-----------------|
| 2014年全国調査 | 16.6% | 52.6% | 24.5% | 3.9% | 2.4% | 100.0% 3687人 |
| | とても感じている | やや感じている | あまり感じていない | ほとんど感じない | | 合計 |
| 2002年庄原市調査 | 41.0% | 43.8% | 12.6% | 2.7% | | 100.0% 1131人 |

出典：2014年全国調査；内閣府政策統括官共生社会政策担当『平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果』。
調査対象は全国60歳以上の男女。郵送配布，郵送回収法による調査。
2002年庄原市調査；調査対象は要介護認定を受けていない広島県庄原市65歳以上の男女。郵送配布，郵送回収法による調査。山本努『人口還流（Uターン）と過疎農山村の社会学』学文社，187～189頁，2013，参照。

以上であるので，A地区のデータも60歳以上の数字を用いる。また，庄原市のデータは65歳以上が対象の調査であるので，65歳以上データで見えていく。庄原市は山村振興法の定める山村を含む中国山地の過疎小市であり，2002年調査当時の人口は21,370人（2000年国勢調査）である。

なお，これらの調査では「あなたは，現在，どの程度生きがい（喜びや楽しみ）を感じていますか」と質問しており，質問のワーディングはほぼ同じである。ただし，「喜びや楽しみ」という括弧内の挿入が全国調査にのみある。この挿入の効果は僅かであろうが，全国調査において，生きがい感を増す可能性はあるだろう。また，回答の選択肢は表5，表6のとおりであり，こちらもほぼ同じとみてよいだろう。庄原市調査のみ「わからない」の選択肢がないが（表6），これを勘案しても，ここでの結論は変わらない。この点は念のため付記しておく。ここで比較する3つの調査はいずれも自記式調査であり，郵送で回収されている。この点はデータの比較に重要な点なので後にふれる。

そこで，調査結果を比較すると，生きがいを「十分」（とても）ないし「まあ」（多少）（やや）感じている者の割合は，全国69.2%→山村限界集落（A地区）72.9%→過疎小市（庄原市）84.8%，となる。ここから，生きがいを感じる者の割合は，「全国≒山村限界集落（A地区）＜過疎小市（庄原市）」となる。

さらには，生きがいを「十分」（とても）感じている者のみで見れば，全国16.6%

表7 2014年全国調査のサンプル構成：地域別

| 大都市 | 人口10万以上の市 (大都市を除く) | 人口10万未満の市 | 郡部（町村） | 合計 |
|-------|-----------------------|-----------|--------|--------|
| 24.1% | 40.5% | 24.7% | 10.6% | 100.0% |

注：大都市は東京都と政令指定都市（2014年調査時点）を含む。
出典：2014年全国調査；内閣府政策統括官共生社会政策担当「平成26年度高齢者の日常生活に関する意識調査結果」

→山村限界集落（A地区）22.3%→過疎小市（庄原市）41.0%，となる。ここから、生きがいを「十分」（とても）感じる者の割合は、「全国<山村限界集落（A地区）<過疎小市（庄原市）」となる。

以上から、総じていえば、高齢者の生きがい意識がもっとも高いのは過疎小市である。ついで、生きがい意識が高いのはあえていえば山村限界集落であり、もっとも生きがい意識が低いのが全国となる。

ただし、全国調査のサンプルは大部分（9割程度）が大都市、市部からのものである（表7）。したがって、全国調査の結果はほぼ都市（市部）の実態を示すものと理解してよい。ここから、高齢者の生きがい意識は、過疎小市でもっとも高く、山村限界集落が中間で、もっとも低いのが都市（市部）となる。

むすび

① 限界集落論への疑問、過疎地域はむしろ住みよい所である可能性が有る ●●●●●●●●●●●●●●●●●●

本稿の調査分析から示唆される重要な結論は、過疎地域や限界集落は高齢者にとってむしろ住みよい地域である可能性があるということである。昨今、限界集落論のみならず、撤退の農村計画という議論まででてきている。これらの議論で強調される重要な論点のひとつが、「過疎集落の高齢者の苦悩」である。

限界集落論での高齢者の記述は先にみたので〔3〕、撤退の農村計画のほうをみておこう。ここにでてくる高齢者は、自動車が利用できない、病気がちの、いよいよ生活が成り立たなくなった高齢者である。このような高齢者像から「過疎集落の高齢者の苦悩」が語られる（林，2011）。限界集落論にしろ、撤退の農村計画にしろ、高齢者の姿は非常に弱々しい。しかし、このような語られ方には、違和感を持たざるをえない。¹¹⁾

本稿のA地区調査の結果では、「生きがい」感を「まったく」あるいは「あまり」

資料1 山村限界集落の集落機能(朝日新聞 2012年6月23日)

著作権上の理由により掲載しておりません。

感じられない高齢者は合計で2割に満たない(図2, 表5)。この人々は、総じていえば、限界集落論や撤退の農村計画の描く高齢者に近い。しかし、それは、決して、山村限界集落高齢者のマジョリティではない。しかも、「生きがい」を感じられない高齢者はむしろ、都市(市部)に多く、3割程度(28.4%)におよぶ(表6(2014年全国調査)参照)。

逆にいえば、A地区の調査によれば、

- ・山村限界集落高齢者の大部分(7割程度)は生きがいをもった人々であり、
- ・その生きがいは、「家族」や「農業」や「自分の楽しみ」や「仕事」や「社会」に支えられている。

これらの知見から示唆されるのは、限界集落論や撤退の農村計画とは相当異なる山村高齢者の姿である。この状況を理解するには、資料1の新聞記事は大いに参考になる。この記事の地域は本稿の調査地域の一部であるが、集落の生活共同(防衛)の機能はまだ生きている。ここでは「二重三重の人間関係」で高齢者の暮らしを守っているのである。ここにあるのは、現代の諸問題にそれなりの反撃力、対応力をもつ、山村限界集落の姿である。

② 生きがい調査の留意点：自記式か、他記式か ●●●●●●●●

ここから、本稿の結論は先行研究の系譜でいえば、「限界集落論とは異なる山村(限界集落)高齢者像」(4)で示した研究に連なるものである。ただし、本稿のこのような知見は、限られた調査からのものであり、さらなる検討は不可欠である。しかし、ここでひとつ強調しておいてよいのは、農山村調査における量的質問紙調査の意義である。

先行研究の二つの系譜(3および4参照)とも、質的(モノグラフ)調査が主な方法であり、それ故に(というべきであろうか)議論の相互交流が少ないように思われる。質的調査の記述はそれぞれに「迫力」があり、「説得力」があり、「リアリティ」がある。そこから、かえって生産的な対話が難しくなることがあるように思うのである。有り体にいえば、それぞれの質的モノグラフはそれぞれの相当異なるリアリティをそれぞれの調査に依拠して、それぞれ独自に語っている。ここにみられるのは、現状分析(社会記述, リアリティ)の並存ないし拡散である。つまり、「それもあるかもしれないが、これもある¹²⁾」という事態である。

量的質問紙調査はこの並存(ないし拡散)からはある程度、逃れることが可能である。量的質問紙調査の方法は研究成果の共有が比較的容易であるからである(山本, 2013: ii)。つまり、ラザースフェルド(2005: XV)の言を用いれば、以下のようである。やや長くなるが引用する。「現代の社会生活は、直接的な観察のみによって理解するには、あまりにも複雑なものになってしまっている。飛行機に乗ることが危険であるかどうか、あるタイプのパンが他のパンよりも栄養があるかどうか、私たちの子供たちにとっての雇用の機会は何の程度のものであるか、ある国が戦争に勝つそうかどうか…。このような種類の問題について理解できるのは、自分で統計表を読み取ることができる人々、あるいは確かに統計表の解釈をさせることができる人々に限られるのである。社会現象の複雑性それ自体が、定量的な言語による表現と解明を必要としている」。

本稿のような高齢者の生きがい意識の高低などについても、ラザースフェルドの言は適用できる。ただし、生きがい研究に関与してきた社会学者は本稿の調査結果にやや意外の感をもつかもかもしれない。表6の2014年全国調査の「生きがい」を感じている者の割合が、従来の値よりやや少ないからである。これは、従来のよく参照される調査が、(面接員による)他記式調査であるが、本稿で用いた調査が(郵送法による)自記式調査であるためである(と思われる)。他記式(2013年, 2012年, 2008年, 2003

表8 生きがい感（全国60歳以上：「あなたは、現在、どの程度生きがい（喜びや楽しみ）を感じていますか」）

| 調査法 | 調査年 | 十分感じている | 多少感じている | あまり感じていない | まったく感じていない | わからない | 合計 |
|-----|-------|---------|---------|-----------|------------|-------|-------|
| 自記式 | 2014年 | 16.6% | 52.6% | 24.5% | 3.9% | 2.4% | 3687人 |
| 他記式 | 2013年 | 38.5% | 40.7% | 16.4% | 3.9% | 0.5% | 1999人 |
| 他記式 | 2012年 | 40.9% | 40.8% | 15.0% | 2.7% | 1.6% | 1631人 |
| 他記式 | 2008年 | 44.2% | 38.3% | 14.2% | 2.7% | 0.6% | 3293人 |
| 他記式 | 2003年 | 39.5% | 42.2% | 14.0% | 2.9% | 1.5% | 2860人 |

出典：2014年調査；表6の全国調査を再掲。調査法は郵送法による自記式調査。

2013年，2008年，2003年調査；内閣府政策統括官共生社会政策担当「高齢者の地域社会への参加に関する意識調査」。調査法は調査員による面接聴取法。

2012年調査；内閣府政策統括官共生社会政策担当「高齢者の健康に関する意識調査」。調査法は調査員による面接聴取法。

年）調査と自記式（2014年）調査での結果の違いは下記のようなものである（表8）。

- ・生きがいを「十分感じている」が，他記式4割程度から自記式2割弱（16.6%）へ減少。
- ・生きがいを「感じている」が，他記式8割程度から自記式7割（69.2%）へ減少。
- ・生きがいを「感じていない」が，他記式2割弱程度から自記式3割弱（28.4%）へ増大。

ここから，自記式調査において，生きがいを感じる者の割合が低くなっていることがわかる。

では，他記式と自記式，どちらの調査結果を採用すべきか。生きがい調査の場合，自記式調査のほうが正確な調査が可能と思われる。面接員の前では，「生きがい」なしとは答えにくいと思われるからである。その理由は種々ありそうである。たとえば，被調査者（回答者）の「見栄」，被調査者が調査者の「期待」に沿おうとする「過同調」などがそれである。いずれにしても，調査では面接員からの影響（「圧力」）から解放された状態で，正直に答えてもらう必要がある。その場合，自記式調査はすぐれた方法と思われる。

面接員による他記式調査は社会調査の「標準的な方法（鮑戸，1987：14）」であり，「もっとも正確な方法（安田，1969：9）」といわれてきた¹³⁾。しかし，自記式調査を見直す議論がある（海野，2008）。今回の調査結果はその見直しを支持する意味ある事例である。すなわち，海野（2008：87）がいうのとは少し違う理由だが，「調査員による面接調査が信頼性の高い測定装置とはいえない状況」があるように思えるのである¹⁴⁾。

【注】

- 1) 相乗的とは本稿の問題意識（生きがい研究）の脈絡では、「一人の人間が、生きがいをもって生きるということが、同時に他の人間にとって、生きがいをもって生きるということの条件になる（見田，1970：196-197）」ということである。他の欲求が相克的であるとは、「もともとは限られた資源しかない世界のなかで、他の個人をおしのけてでもその生存条件を確保しておこうとする合理性として、その起源を理解することができ（見田，1970：194-195）」「自分がそれをより大きく充たせば充たすほど、他の人間はそれを充足する機会が減少するということ、反対に他の人間がそれを満喫すればするほど、自分はそれを我慢しなければならないという構造を持っている（見田，1970：196）」ということである。
- 2) これについてラザースフェルド（1984：20）は「民俗社会（folk society）が正確に何であるか、誰が言えるであろうか。世論の真の意味について数多くの議論を読まなかった人がいるだろうか」と例示する。
- 3) 山村概念の曖昧性は古くは柳田（1938）にも指摘がある。最近では、秋津（2000）参照。
- 4) 限界集落概念へのこのような批判は山本（2013：169-183）が「限界集落概念が生活を見ないことへの批判」とよんだものである。
- 5) 高野（2008）や吉岡（2010）の示す状況を理解するには、後掲「むすび」の①の資料1は示唆的である。
- 6) この法律において「山村」とは、「林野面積の占める比率が高く、交通条件及び経済的、文化的諸条件に恵まれず、産業基盤及び生活環境の整備等が他の地域に比較して十分に行われていない山間地その他の地域」と定義される（農林水産省『山村振興法の一部を改正する法律のあらまし』平成27年6月）。
- 7) 無医地区とは、「医療機関のない地域で、当該地区の中心的な場所を起点として、おおむね半径4 kmの区域内に50人以上が居住している地区であって、かつ容易に医療機関を利用することができない地区」（厚生労働省『無医地区等調査』「用語の解説」参照
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/76-16.html>）と定義される。
- 8) 老人線とは、「一定の暦年齢以上の人々を“老人”と定義するための人為的、便宜的な境界線。老人というカテゴリーを暦年齢で具体的に確定したもの」である（浜口ほか編，1996：477）。本稿で用いた山本（2013：115）の中津江村調査では、「あなたは何歳から高齢者だと思いますか」と質問した。老人線は老人の社会学的概念とセットで議論されるが、これについては、大道（1966：39-82）を参照。
- 9) 本稿では高齢者（70歳以上）と非高齢者（60歳代以下）を比較するが、その回答者の内訳は、
高齢者…70歳代：59%，80歳代以上：41%
非高齢者…60歳代：45%，50歳代：27%，40歳代：15%，30歳代：8%，20歳代：5%
である。したがって、以下本稿における非高齢者とは60歳代から50歳代の層が中核であることを留意願いたい。
- 10) ほぼ同様の調査結果は、広島県過疎地域での調査（広島県庄原市，2002年調査実施，表A）参

照。ここでも加齢とともに生きがいをを感じる者の割合は落ちている。

表A 生きがい感（年齢別）

| | とても感じる | やや感じる | あまり感じない | ほとんど感じない | 合計 |
|--------|--------|-------|---------|----------|------|
| 65～69歳 | 47.9% | 41.3% | 9.2% | 1.6% | 315人 |
| 70～74歳 | 44.6% | 43.5% | 9.8% | 2.1% | 336人 |
| 75～79歳 | 40.2% | 46.2% | 12.4% | 1.2% | 249人 |
| 80～84歳 | 26.2% | 47.0% | 21.5% | 5.4% | 149人 |
| 85歳以上 | 32.9% | 40.0% | 18.8% | 8.2% | 85人 |

出典：山本努『人口還流（Uターン）と過疎農山村の社会学』学文社，187～189頁，2013。

- 11) ただし、このような社会的弱者としての高齢者像（問題）をすべて否定する意図はない。実際、私自身もそのような問題を過疎地域高齢者の自殺問題を例にとりて問題提起したこともある（山本，1996）。しかし、それはあくまで、過疎問題の範疇であって、限界集落論や「撤退の農村計画」論の範疇ではない。また、表Bの農山村高齢者の記述例を参照されたい。ここからも、限界集落論や「撤退の農村計画」論と相当異なる高齢者像があることがわかる。

表B 農山村高齢者像

| | |
|------------------|---|
| 徳野 (1998：154) | 「長年農山村を調査などで駆け回っていて感じることにひとつに、農山村の年寄りの顔がいい顔をしているということである。…統計データで所得水準や病院などの施設配置，交通等の利便性などを都市部と比べてみれば農山村の厳しさは益々増加している。…しかし、重要なことは、だからといって、農山村に住み暮らす高齢者が不幸だとは必ずしもいえないことである。むしろ、彼らの方が都市部の高齢者より幸せとまではいえなくても恵まれていると考えられる理由・現象が少なからずある」 |
| 小川 (1996：68) | 「農村を歩いて、高齢者と話している限り、「高齢者イコール弱者」という既存のイメージは全く的是な感じがする。都市の高齢者のように、定年ショックで社会的な死を宣告され、テレビだけを友とする生活のうちに心理的な死を宣告され、しかしなかなか生理的には死ねない体を病院に通わせたり、預けたりしている姿は、農村にもないとはいえないが、現役としての心意気を持っている高齢者は、農村ではかなり多い」 |
| 曾根 (2010：13) | 「村が喘いでいる。ことのほか山里が喘いでいる。二人に一人がお年寄りになった。…（中略）…村から音が消えていった。子どもの泣き声はもう長い年月、聞いたことがない。お盆とお彼岸と正月に子や孫たちが帰ってくればと心待ちにしている。息子一家は同じ市だが街中に住んでサラリーマンをして暮らしている。車で四十分はかかる。遠くに嫁いで、もう子どもが大学に行く年齢になった娘がときどき電話で様子をうかがってくる。「主人と話すんですよ。誰にもお世話にならずに暮らさんとね。みんな必死ですよ。私たち年寄りはね。ははは」…」 |

- 12) その例として、本稿3の³の大野（2007）の高齢者像と、表Bの3つの農山村高齢者像を比較されたい。徳野（1998）、小川（1996）と、大野（2007）、曾根（2010）の記述は同じ過疎農山村高齢者であるにも関わらず、その内容は大きく異なる。限界集落論を提唱（支持）する、大野（2007）、曾根（2010）の高齢者は弱々しい。それに対して、限界集落論に依拠しない、徳野（1998）、小川（1996）の高齢者は決してそうではない。

- 13) 面接員による他記式調査を飽戸（1978：14）は「訪問面接調査法」、安田（1969：9）は「個

別面接調査法」と呼んでいる。

- 14) 海野 (2008: 87) がいうのは「調査員の質を一定に保つのが困難」になってきたという理由である。勿論、これももっともな理由である。これに対して、本稿で主張するのは、「面接員からの影響 (「圧力」)」による回答の歪みである。ほぼ同様の主張はハフ (1968: 33-35) にもある。ハフが指摘するのは。「相手をよろこばせるような答えをしたいという欲求」である。

【付記】

本稿は山本研究代表の科学研究費 (研究課題番号: 23530676, 研究課題番号: 15K03853), および、高野和良九州大学教授研究代表の科学研究費 (研究課題番号: 25380740) による研究成果の一部である。なお、本稿のA地区調査は仲正人 (県立広島大学大学院生), 肥後加苗 (同大学院生), 岡畑舞 (同学部生), 佃明里 (同学部生), 塚本直巳 (同大学院OB) の各氏とともに行った (括弧内は調査時点)。皆さまに感謝致します。

【参考文献】

- ・秋津元輝「二十世紀日本社会における「山村」の発明」日本村落研究学会編『年報村落社会研究』36, 農山漁村文化協会, 151~182頁, 2000
- ・鮑戸弘『社会調査ハンドブック』日本経済新聞社, 1987
- ・大道安次郎『老人社会学の展開』ミネルヴェ書房, 1966
- ・浜口晴彦・内田満・柄澤昭秀・嵯峨座晴夫・東清和・尾沢達也・佐藤進・大工原秀子編『現代エイジング辞典』早稲田大学出版部, 1996
- ・林直樹「過疎集落からはじまる国土利用の戦略的再構築」『週刊農林』2114, 農林出版社, 8~9頁, 2011
- ・ハフ, D., 高木秀玄訳『統計でウソをつく法—数式を使わない統計学入門—』講談社 (Blue Backs), 1968
- ・神谷美恵子『生きがいについて』みすず書房, 1966
- ・木下謙治「高齢者と家族—九州と山口の調査から—」『西日本社会学会年報』創刊号, 3~13頁, 2003
- ・古谷野亘「生きがいの探求—高齢社会の高齢者に生きがいが必要なわけと生きがい対策—」『生きがい研究』15, 22~36頁, 2009
- ・ラザースフェルド, P.F., 西田春彦・高坂健次・奥川櫻豊彦訳『質的分析法—社会学論集—』岩波書店, 1984
- ・ラザースフェルド, P.F., 佐藤郁哉訳「初版への緒言から」ザイゼル, H.『数字で語る—社会統計学入門—』新曜社, pp.15~18, 2005
- ・Mathews, G. *What Makes Life Worth Living?: how Japanese and Americans make sense of their worlds*, University of California Press, 1996
- ・見田宗介『現代の生きがい—変わる日本人の人生観—』日経新書, 1970

- ・小川全夫『地域の高齢化と福祉—高齢者のコミュニティ状況—』恒星社厚生閣，1996
- ・大野晃「限界集落論からみた集落の変動と山村の再生」日本村落研究学会編『むらの社会を研究する—フィールドからの発想—』農山漁村文化協会，131～138頁，2007
- ・曾根英二『限界集落—吾の村なれば—』日本経済新聞出版社，2010
- ・鈴木広『都市化の研究』恒星社厚生閣，1986
- ・高野和良「地域の高齢化と福祉」堤マサエ・徳野貞雄・山本努編著『地方からの社会学—農と古里の再生をもとめて—』学文社，118～139頁，2008
- ・徳野貞雄「少子化時代の農山村社会—「人口増加型パラダイム」からの脱却をめざして—」山本努・徳野貞雄・加来和典・高野和良『現代農山村の社会分析』学文社，138～170頁，1998
- ・海野道郎「調査票の設計とその技法」新睦人・盛山和夫編『社会調査ゼミナール』有斐閣，79～91頁，2008
- ・山本努『現代過疎問題の研究』恒星社厚生閣，1996
- ・山本努『人口還流（Uターン）と過疎農山村の社会学』学文社，2013
- ・柳田国男「山立と山隊」柳田国男編『山村生活の研究』国書刊行会，538～548頁，1938
- ・安田三郎『社会調査ハンドブック 新版』有斐閣，1969
- ・吉岡雅光「限界集落の限界とは」『立正大学人文科学研究所年報』48，17～30頁，2010